

海外研修ファイル

海外出張者報告

黒羽 亮太

(くろは りょうた)

人文学部准教授

2023年夏、3年半ぶりの海外調査へ行ってきた。今後の旅の目的は大きく二つ。一つには白村江の故地を歩くこと、もう一つは、軍事国家日本との対峙を余儀なくされた新羅の対日防衛戦線を实地に観察することである。

日本史を勉強したことがある人ならば、「白村江の戦い」という言葉はどこかで聞いたことがあるだろう。663年、百済救援に向かった倭国軍が朝鮮半島西海岸において、唐海軍のために大敗北を喫した戦争である。白村江はまさしく「日本史の舞台」である。

これより以前、中国大陸では三国時代、魏晋南北朝時代と、およそ400年もの間、戦乱と分裂の時代が続いていた。そういう時代が終わりを告げ、隋・唐という巨大国家が登場したことは、周辺地域の人々に大きな衝撃を与えた。倭国における、いわゆる「聖徳太子」の諸政策や「大化の改新」と称する諸改革も、こうした荒波の時代と無関係でないことは、今や周知の事実である。かかる緊張の極致が、百済・高句麗の滅亡(=唐による朝鮮半島支配)と、白村江の戦いであった。倭国滅亡の危機は、すぐそこまで迫っていた。

百済復興運動から白村江へ至る動向などは、唐と倭の双方に記録が残されており、両者を突き合わせながらの検討はとても面白い。『日本書紀』には、倭国が百済王に冊立した余豊璋は州柔城(『旧唐書』では周留城)にいて、一時は前線に近い避城へ移ったとある。水陸

二方面から周留城を攻めていた唐と、救援に向かった倭軍の間に生じたのが白村江の戦いであるから、故戦場はこの近くにあるに違いない。ただ、史料に記されたこれらの場所が実際にはどこに当たるのか、という問題になると見解は分かれている。そのため今回の踏査は、真夏の炎天下に山城をいくつも歩いて回ることとなり、まさに苦行の連続であった。それでも聖興山城、金堤城山山城、白山城、位金岩山城、乾芝山城などを歩き回って、史料の理解は格段に深まったと思う。

さて、白村江の敗北により百済復興は失敗に終わり、倭国が対外防衛のために、山口県を含む西日本各地に朝鮮式山城を築いたこともご存知のことだろう。このような時代に新たな国づくりを進めた古代日本は、当然ながら戦時体制を基本とする「軍事国家」に他ならなかった。そういう日本律令国家の肖像は、むしろ日本に残された史資料によっても描き出すことは可能であるが、これをより立体的なものにするためには「他者の目」、すなわち周辺国が日本をどのように見ていたかという視点が有効である。

唐と結び、その唐を追い出すことで半島全域に支配を及ぼすようになった新羅は、半島歴代政権において唯一、日本海側に首都をおいた王朝である。それ故に、対立する日本の軍事的脅威から首都を防衛することは現実的な課題であった。関門城跡は、蔚山から古都慶州方面へ抜ける街道を塞ぐように位置し、あたかも日本の水城のようであった。水城が白村江の翌年664年に作られたのに対し、関門城は722年。日本では間もなく聖武天皇が即位する奈良時代である。この頃に至ってもなお、日本が軍事国家の相貌を帯びていたことを物語る物証と言えようか。



開岩寺から位金岩山城を望む



毛火里関門城門跡